

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13405

研究課題名（和文）アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海文学・思想の受容と影響に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Influences of Caribbean Literature and Ideas on African American Literature

研究代表者

山内 玲 (Yamauchi, Ryo)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：60609874

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アフリカ系アメリカ人の作家の作品において、カリブ海の文学者・思想家によるThe Tempestの翻案に着想を得た小説の分析を行い、その創作活動がアメリカ合衆国の枠組みにとどまらず、国境を越えカリブ海にその題材を求めたことの意義を考察することにある。具体的には John Edgar Widemanの作品におけるキャリバンの解釈を通じて米国の黒人男性の諸問題を象徴させると同時に作家固有の父子関係を暗示させる技法について考察した。また、派生的にWilliam FaulknerとGarcia Marquezの比較研究を行い、カリブ海地域にその根を持つ食人種のイメージの問題を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アメリカ文学研究の枠組みにおいて主流＝白人中心のアメリカ文学における翻案とは異なりカリブ海という回路を経てなされたアフリカ系アメリカ人のThe Tempestの翻案の問題を考察することにより、少数派の文学として位置づけられるアフリカ系アメリカ文学の視座から、ヨーロッパの伝統に対抗すべく形成された正典的なアメリカ文学を、合衆国の国境を越えたトランスナショナルな枠組みから問い直す意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims at examining African American writers' adaptations of Caribbean literature and ideas and considering the transnational aspects of their creative sources of fiction about African Americans by focusing on fiction based on African American version of The Tempest. In particular, the paper on African American version of Shakespeare's canonical play in John Edgar Wideman's Philadelphia Fire reveals how he utilizes the hyperbolic images of black masculinity represented by his version of Caliban to imply the difficulties he had in communicating with his imprisoned son and describing the dysfunction of the father-son relationship. This study also develops into a comparative study of William Faulkner and Garcia Marquez, examining the question of cannibalism that derives from the West Indies.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アフリカ系アメリカ文学 カリブ海文学 翻案 黒人男性 ワイドマン ガルシア＝マルケス フォークナー 肉食

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

科学研究費助成事業 研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

研究代表者がこれまで行ってきた研究の延長上に、本研究がカリブ海という国境を越えたコンテキストにおいてアメリカ文学を議論する近年の趨勢に位置付けることができると同時に、アフリカ系アメリカ文学研究におけるカリブ海の脱植民地主義や人類学的知見の影響を巡る議論の枠組みにおいて意義を持つ研究を行うことができるのではないかと目論見が、研究開始当初の背景としてあった。第一に、William Faulkner と Zola Neale Hurston の比較研究における文献調査の過程において、アメリカ南部とハイチの地政学的関係からカリブ海を視野に入れた先行研究に接したことは本研究の着想に至った一つ目の要因である。例えば John Smith and Deborah Cohn, ed. *Look Away!: The U.S. South in New World Studies* (2004) など、Faulkner を代表とする南部文学の研究にカリブ海という国境を越えたコンテキストを導入した研究は多い。Hurston についても、*American Literature* に掲載された Brian Russell Roberts “Archipelagic Diaspora, Geographical Form, and Hurston's *Their Eyes Were Watching God*” (2013) を始めとして、人類学者としての Hurston のハイチ滞在を手掛かりにしてカリブ海を議論の視野に入れる研究が現れていた。とはいえ、ジャマイカ出身の Claude Macay (1889-1948) のようなアフリカ系の作家をカリブ海文学の枠組みから議論する趨勢はあるものの、アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海の意義を巡る包括的な議論は十分に なされているとは言い難かった。第 2 に、2016 年 6 月に中四国アメリカ文学学会大会のシンポジウムで行った Wideman の作品における黒人の男性性を巡る発表は、本研究の着想のより直接的な要因と言える。本発表で Wideman の議論を行うのに先立ち、*Modernism and the Harlem Renaissance* (1987) で Houston A. Baker Jr. が展開したアフリカ系アメリカ文学の批評理論の構築において、*The Tempest* の翻案を経由したカリブ海の脱植民地主義抵抗言説を援用したことの問題を論じ、その援用が Caliban という男性を扱っているにもかかわらずそのジェンダーの問題を無視したという Shawalter の前掲書における批判を参照した。本発表ではこうしたジェンダーをめぐる諸問題と作家固有の問題の関係についての議論が、後の課題として残った。その意味で、本研究はこれまでの研究に対する継続的な議論を展開することになる。

2. 研究の目的

以上の点を踏まえた上で、本研究は、アフリカ系アメリカ人の作家のカリブ海諸島における *The Tempest* の翻案に着想を得た作品を中心として、正統的な文学史の見直しという研究史上の文脈に置いた上で国境をまたいだトランスナショナルな読解という枠組みから検討することを目的とする。本研究の意義を説明するにあたり、まずは先行研究に対する位置づけを確認しておきたい。初上演から 400 年以上経つ William Shakespeare 作 *The Tempest* の翻案を行った文学作品は、詩・戯曲・小説・批評に至るまで多岐にわたり、その翻案を巡る先行研究も膨大な数に上る。アメリカ文学の枠組みでいえば、魔術師 Prospero の漂着した島を新大陸の暗喩と解釈する「アメリカ学派」について Alden T. Vaughn & Virginia Mason Vaughn *Shakespeare's Caliban: A Cultural History* (1991) が詳らかにしているが、とくにアメリカ文学の源流に *The Tempest* を位置づける Leo Marx *The Machine in the Garden* (1964)、アメリカ文学の原型として *The Tempest* にアメリカ先住民のイメージを読み解く Leslie Fiedler *The Return of the Vanishing American* (1968)、さらにはフェミニズムの見地から Prospero の娘 Milanda の再解釈に焦点を据えた Elaine Showalter *Sister's Choice* (1991) など、旧宗主国イギリスの正典的古典を我が物として換骨奪胎するがごとき白人中心の正典的なアメリカ文学史の構築に *The Tempest* の翻案と再解釈が寄与している。こうした見地からアフリカ系アメリカ文学における *The Tempest* の翻案を検討するだけでもキャンソンの見直しという見地から本研究の意義はあるだろうが、それに加えて看過してはならないのがカリブ海における *The Tempest* の翻案の歴史である。英領バルバドス出身の George Lamming による評論集 *The Pleasure of Exile* (1960) やフランス領マルティニク出身の Aimé Césaire による戯曲 *Une Tempête* (1968) などに代表されるカリブ海出身の文学者による *The Tempest* の翻案は、ヨーロッパの旧宗主国に対する植民地の抵抗言説あるいは脱植民地主義において展開されており、この翻案を巡る問題についても Jonathan Goldberg *Tempest in the Carribean* (2004) に代表されるように研究が多くなされている。日本国内においても、本橋哲也により編纂された近年の *The Tempest* 研究の成果とともに、Césaire の戯曲が翻訳を通じて紹介されている。にもかかわらず、Wideman などカリブ海の *The Tempest* の翻案に創作の着想を得たと考えられるアフリカ系アメリカ人作家の翻案小説に関しては、どの先行研究でも注釈で数行で言及される程度の扱いで十分な考察がなされていない。*The Tempest* の翻案に関する研究において十分な考察がなされてこなかった領域を埋める本研究は、アメリカ文学研究の枠組みにおいて、主流＝白人中心のアメリカ文学における翻案とは異なりカリブ海という回路を経てなされたアフリカ系アメリカ人の *The Tempest* の翻案の問題を考察することにより、少数派の文学として位置づ

けられるアフリカ系アメリカ文学の視座から、ヨーロッパの伝統に対抗すべく形成された正典的なアメリカ文学を、合衆国の国境を越えたトランスナショナルな枠組みから問い直す意義を持つ。

3. 研究の方法

研究対象の作家の著作(一次文献)とそれに関連する先行研究・関連書籍(二次文献)の文献調査を行ない、それに基づき個々の作品分析と考察を行なう。

4. 研究成果

本研究の成果を報告するのに先立ち、上記の研究着想時の背景と研究目的に関して、当初予定されていた計画から2点の大幅な変更を行うことになった経緯を説明する。1つ目は当初本研究で扱う予定であったアフリカ系アメリカ人作家の作品を研究期間中(2017-2019)に扱うことができなかったことである。具体的には、John Edgar Wideman の作品の研究を行った後に、Gloria Naylor *Mama Day* (1988)、Toni Morrison の *Tar Baby* (1981)を考察対象とし、これらの作品でなされている *The Tempest* の翻案を男性作家と女性作家の違いという性差の見地から考察する予定であった。しかしながら、この当初の予定は、二つ目の変更点の影響を受け、期間中での成果の発表のめどが立たなくなった。その変更とは、カリブ海文学における人食のモチーフの考察を通じて展開した García Márquez の作品の研究である。カリブ海文学における *The Tempest* の翻案というテーマについて先行研究を調査していく過程で、戯曲中におけるキャリバンという怪物的存在と食人種(カニバル)の音声的な類似性からはじまり、カリブ海文学における反植民地主義の展開においてそのアイコン的役割を担うという点でも類似性を帯びるといふ先行研究の指摘にたどり着いた。こうした先行研究を視野に入れながら、食人行為の根幹にある食肉という問題をアニマル・スタディーズの観点から分析する視点を William Faulkner の *The Hamlet* と García Márquez の *Cien años de soledad* の比較考察という具体的な作品分析に結実させることとなった。この変更は、米国文学という国家の枠組みを超えトランスナショナルな視点から研究を行うという本研究の目的に鑑みて、考察対象となる文学作品もまた国家の枠組みに制限されず、逆に国家の枠組みに基づいて文学作品を研究する視点を問い直すことになるという指針は保持されており、本研究の目指す方向の帰結であったと考え、研究対象の変更を行った次第である。

以上の変更点を踏まえた上で、本研究期間中に行った4つの研究発表を研究成果として挙げる事ができるであろう。1つ目の研究成果は、2018年5月にラスベガスで開催された MELUS の研究大会で、“The Failed Staging of *The Tempest* and Problems of Afro-American Fatherhood in John Edgar Wideman's *Philadelphia Fire*”という題目で行った発表である。1990年に出版された本作品は、カリブ海地域の文学における *The Tempest* の翻案を踏まえ、アフリカ系アメリカ人作家がアメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人の問題としてキャリバンの翻案を換骨奪胎した作品や学術的な議論が発表されていたことを踏まえ、多くの黒人男性知識人が避けておった黒人男性のセクシュアリティという問題を、性欲旺盛な黒人男性というステレオタイプをあえて過剰なまでに強調する Wideman の翻案について論じた。Wideman の場合、アフリカ系アメリカ人男性の困難を示すと同時に、黒人男性のセクシュアリティをめぐるステレオタイプを具現するキャリバンの翻案を展開することを通じて、殺人を犯し投獄された自分の息子という個別の問題を暗示する。殺人を犯し投獄された息子をめぐるメタフィクショナルな断章を、*The Tempest* の上演とその失敗という作品世界のエピソードの記述と交錯させることで、父と息子の関係に具現されるアフリカ系アメリカ人男性の苦難の形象と反復という問題が顕在化されるとともに、息子との関係において言葉にできない個別の父子の断絶を潜在的な問題として暗示させていることを論じた。

2つ目の研究成果は、カリブ海地域の文学の影響というテーマから派生した問題意識のもと、2018年10月に Southeast Missouri State University で開催された Faulkner and García Márquez conference にて、“Human Animality in Faulkner's *The Hamlet* and Márquez's *One Hundred Years of Solitude*”という題目で行った研究発表である(発表時は英語での発表であることを考慮し、*Cien años de soledad* の英訳のタイトルを題目に使用した)。García Márquez の作品はカリブ海沿岸地域の文化的伝統が群島地域のアフリカ系の文化とは異なる形でその想像力の苗床になっていることはよく知られているが、そうした要素も含まれる人間の動物性という見地から、Faulkner の *The Hamlet* との比較を通じて考察を展開した。具体的には、肉食をめぐるアニマル・スタディーズの議論を参照し、García Márquez の *Cien años de soledad* のメインテーマであるインセストと結び付けられる人食のモチーフを、肉食をめぐる記述を通じて *The Hamlet* における Ike Snopes と雌牛の交流のエピソードと比較することにより、両作品が Jacques Derrida が carnophallogocentrisme (肉食 - ファロスーロゴス中心主義)を提唱することを通じて批判した、肉食によって支えられる人間中心主義と人間の主体形成の問題をそれぞれ独自のやり方で扱っていることを論じた。

3つ目の研究成果は、2019年6月に開催された日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会で

「豚のしっぽ再考 『百年の孤独』における動物化の主題と修辞」という題目で行った研究発表である。これは2つ目の研究成果より派生的に生じたものであり、前者では比較研究という性質上十分に扱いきれなかった *Cien años de soledad* の先行研究の議論を踏まえた上で、インセストの結果豚の尻尾をもって生まれたという物語の中核となるエピソードに対し、インセストに焦点を当てる先行研究の西洋中心主義の問題点を批判した上で、人間と動物の境界をめぐる作品の世界観がコロンビアひいてはラテンアメリカの社会・歴史的な文脈と切り離しがたく結びついていることを論じ、その中核的シンボルとなる豚の尻尾の意義を明らかにした。

4つ目の研究成果は、2020年3月にテキサス州オースティンで開催された SECOLAS の年次研究大会で、“Anthropophagy, Cannibalism and Questions of Meat Eating in García Márquez’s Writing and Fiction” という題目で行った研究発表である。上記の研究発表で議論した食人のテーマを García Márquez のキャリア全体に考察の視野を広げ、肉食をめぐる作家の思想とその思想を具現する小説技法の変遷を論じたものである。

本研究期間中に刊行された論文はないが、上記4つの研究発表のうち、最初の3つに関しては、それぞれの発表をもとにした論文の刊行が決まっている。1つ目は、2020年10月に刊行予定の「『フィラデルフィア・ファイア』における米国黒人男性版『あらし』と父子の沈黙」(水野尚之・高野泰志・竹井智子編『それぞれの方法 アメリカ文学研究最前線(仮題)』、松籟社)である。これは1つ目の研究発表を元とした研究論文である。2つ目は同じく2020年10月に刊行予定の“Carnivores and Cannibals: Human Animality in Faulkner’s *The Hamlet* and García Márquez’s *Cien años de soledad*.” (Christopher Riegar and Andrew B. Leiter, ed. *Faulkner and García Márquez*. Southeast Missouri State University Press)である。これは2つ目の研究発表の内容を拡大した研究論文で Carol Adams のフェミニスト肉食主義の議論を参照し、両作品における食肉の問題をジェンダーの観点から掘り下げた。3つ目は、2020年7月に刊行予定の雑誌論文「『百年の孤独』の豚の尻尾再考：先住民の周縁化をめぐる動物化の主題と修辞」(『ラテンアメリカ研究年報』第40号)である。これは3つ目の研究発表をもとに、その内の先住民文化の議論に焦点を絞ったものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山内 玲	4. 巻 40
2. 論文標題 『百年の孤独』の豚の尻尾再考：先住民の周縁化をめぐる動物化の主題と修辞	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ研究年報	6. 最初と最後の頁 ?
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Ryo Yamauchi
2. 発表標題 The Failed Staging of The Tempest and Problems of Afro-American Fatherhood in John Edgar Wideman's Philadelphia Fire
3. 学会等名 Annual conference of MELUS (Multi-Ethnic Literature of the United States) (@Las Vegas, Nevada, USA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryo Yamauchi
2. 発表標題 Human Animality in Faulkner's The Hamlet and Marquez's One Hundred Years of Solitude
3. 学会等名 Faulkner and Garcia Marquez conference (@Southeast Missouri State University, Missouri, USA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山内 玲
2. 発表標題 豚のしっぽ再考 『百年の孤独』における動物化の主題と修辞
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryo Yamauchi
2. 発表標題 Anthropophagy, Cannibalism and Questions of Meat Eating in Garcia Marquez 's Writing and Fiction
3. 学会等名 Annual conference of SECOLAS (Southeastern Council of Latin American Studies) (@Austin, Texas, USA) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Ryo Yamauchi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Southeast Missouri State University Press	5. 総ページ数 ?
3. 書名 "Carnivores and Cannibals: Human Animality in Faulkner 's The Hamlet and Garcia Marquez 's Cien anos de soledad" (Faulkner and Garcia Marquez所収)	

1. 著者名 山内 玲	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 ?
3. 書名 「『フィラデルフィア・ファイア』における米国黒人男性版『あらし』と父子の沈黙」(『それぞれの方法 アメリカ文学研究最前線(仮題)』(水野尚之・高野泰志・竹井智子編)所収)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「ラテンアメリカ文学からの視点 もう一つの<アメリカ>」(竹内理矢・山本洋平編著『シリーズ世界の文学をひらく アメリカ文学をひらく 新たな文学史にむけて(仮題)』(ミネルヴァ書房 2020年刊行予定)所収)</p> <p>刊行予定の論文・著作ではページ数が本研究成果報告書の執筆時点でページ数が確定していないので、?としてある。 なお、上記の研究発表・論文のタイトルで、スペイン語のアクセント記号、ティルデは、大学で定められている研究成果報告書の入力用のフォーマットでは入力できないので、記号はついていないが誤字ではない。また、欧文における書物のタイトルはイタリックにするのが基本的な書式であるが、このフォーマットでは斜字体にすることができず、書物のタイトルはイタリックとなっていないが、これも報告者のミスではない。至急改善が望まれる。</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----